
Wind -an irregurar blow tender breath-

teru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wind - an irregular blow tend
er breath -

【Nコード】

N8070X

【作者名】

teru

【あらすじ】

この作品はteruの処女作(?)ってやつです。読みにくい点、改善したほうが良い点などありましたら感想にて送ってくださいと感謝感激です。

タイトルを見てわかって頂いた方も多いと思いますが、この小説はWind - a breath of heart - の二次創作です。また、タグにもありますが主人公が少々チート気味です。(まあ、そこまで強くしたつもりはありませんが)

とにかく、そういうのが苦手な方は読むのをやめてA117
を押したほうがいいのかもです。

舞台設定（前書き）

感想で「初見さんにはwindってゲームのことは知らないよ」等
等言われましたので解説を出してみました。

とりあえず用意悪くてすみません；；

まあ、ぶつちやけググれば出てくるくらいの情報+teruの個人的な感想+位しか書かない（書けない）のでググった方が早いかもしれない。

それでもいいよって方はどうぞ

ちなみに。あらすじですが2分ほぼ丸々書いちゃってるんでかなり長くなってます。読むときは気合入れて読んでくださいね。

舞台設定

w i n d - a b r e a t h o f h e a r t -

2002年4月19日にminority様より発売された(元は18禁)恋愛アドベンチャーゲーム。

(歴史についてはwikiを参照してください。大まかなことは壮一が第一話で言ってます)

おまじない程度の「能力」を使うことのできる風音町を舞台に主人公+5人のヒロインがメインに動く。

以下原作キャラ紹介(wikiからのコピペをベースにちよくちよく解説入れてます)

丘野 真 (おかの まこと)

原作の主人公。サツパリした性格の好青年。成績は並だが頭は切れる。

真の能力は序盤では明かされず、ゲーム・アニメ・小説ともに事件解決の鍵になっている。

(今回のSS内での能力はゲーム版の「他人の力を吸収する力」で行きます)

鳴風 みなも (なるかぜ みなも)

真とひなたの幼馴染み。昔、真と幼さゆえの結婚の約束を交わしており、再会を心待ちにしていた。隣の学園に通っている。才色兼備で努力家なので今までに何人も男子生徒に告白されたが、ことごとく断っている。

無類のタコヤキ好き。自分で料理するのは、序盤では壊滅的に駄目だったが、ひなたに教えてもらい運動会までには見違えるほどに上達した。

能力は「風を起こす」。

(今回のSS内での「真との」メインヒロイン。まあ要するに「みなも」で彩ちゃんを助けてしまおう「って感じですかねw」)

丘野 ひなた (おかの ひなた)

真の義理の妹。母親に幼い頃から料理を仕込まれており、みなもに教えられるほど得意としている。口癖は「うにゅ」。

能力は「尋常でないジャンプ力」。普通の運動能力も高いので運動会では戦力として重宝された。

実は秋人の子供の一人でみなもの実妹、わかばの双子の姉。

(SS内で影が薄くなりそうな子no.1。正直出す方法が見つからない……………)

藤宮 望 (ふじみや のぞみ)

みなもと同じ学園に通う藤宮姉妹の姉。剣術の使い手で、剣道部所属ではないが男子部員よりも圧倒的に強い。しかし重度の心臓病を患っており、時折倒れることがある。

能力は「万物を切断する衝撃波を出す」。

藤宮 わかば (ふじみや わかば)

みなもと同じ学園に通う藤宮姉妹の妹。望と一緒に喫茶店「One day」でアルバイトをしている。丁寧で物腰が柔らかく、誰にでも優しい。

秋人の子供の一人で、能力(「治癒」と「予知夢」)の質は三人の中で一番高い。

自分が藤宮家の人間ではないと気づいており、ゲームのわかばルートでは望との絆の強さをうかがわせる回想がある。

(この二人もSS内で影が薄くなりそうな子no.2&3。……………正直キャラを動かすのってムズい)

月代 彩 (つきしろ ひかり)

骨董品店を営んでいる謎の少女。みなもとと同じ学園の制服を着ていることもあるが、学園内では見かけない。無表情で、どこか達観(諦観?)している。口癖は「とんだ茶番ですな」。

能力は望とほぼ同じ。小説版では「他人に気に留められなくなる」という能力もあつた。

血液恐怖症であり、あくまで「同化体にする」ことには慣れているが人を殺すことにはなれない。(小説版より)

また、「能力を持った相手を同化体にする刀」を生み出す能力があつた。

(SS内での「壮一との」メインヒロイン)

橘 勤 (たちばな つとむ)

真の同級生。生まれも育ちも風音市だが関西弁を話す。お調子者だが、授業以外はほとんど勉強していないのに全国模試で100位以内を取るほどの秀才。子供の頃クラゲに刺された事があり、それ以来海で泳げなくなっている。

能力は「スーパーツトムパンチ」であると自称。真からは「記憶力の増幅」を持つているために勉強をあまりしなくても成績がいいのではと推測されている。だが実際には何の能力も持っていないようである(ビジュアルファンブックより)。

(サブキャラその1。後バカ。それ以上の説明が見つからない)

紫光院 霞 (しこういん かすみ)

勤の幼なじみで、彼の弱みを多く握っている。生徒会委員。家庭用ゲーム機版で彼女のシナリオが追加された。

能力は「読心」だが負担が大きいため、いつもは特殊な眼鏡をかけて抑えている。

(サブキャラその2。とはいえこっちはなんかちょっとだけ出せそ

うな予感)

鳴風 秋人 (なるかぜ あきひと)

みなもの父で歴史学者。料理の腕は最高級で、フランス料理のフルコースを家庭で作ったりする。

能力は「煙を自在に操る」。

(サブキャラその3。一番扱いに困る人。理由は後で話します)

舞台の解説(ざっくりとしか解説しないので興味がある方は原作をプレイしてください!&&ここからは原作のネタばれになります!原作未プレイかつ、原作をプレイしたいと思う方は第一話へどうぞ!)

主人公である真は母親、ひなたとともに昔住んでいた風音町に帰ろうとする。（母子家庭）

その一日前。突然母親が消え去ってしまう。

そんな中、真たちは母親の望んだ風音町へと向かうのであった。

真たちが風音町に着き半年がたった。

ある日、教室に教科書を忘れたため、放課後に取りに戻ると屋上から聞いたことのあるハーモニカの音がする。

その音につられて屋上へ行くと幼いころに引越して別れたみなもと再会する。

そして、望、わかば、彩、みなもの父親（秋人）と会い、話は中間テスト（の勉強会）、ひなたの誕生日、運動会、期末テスト（の勉強会）、夏休みの海へと進んでいく。

（みなも 解説）

夜になり、バーベキューも終わった後、真は夜の海辺でみなもと二人で話をする。

その後、町の「能力」がどんどん薄れていくという事件が発生。

そのため彩は、力の大きな秋人を同化体にする。

秋人は最後の力を振り絞り家に帰り、みなも、真に後を頼む旨を継げた後に消えてしまう。

みなもは家族を失ってしまったショックで家から出ない。心配した真がみなもの家に行くと、

（中略 気になる方はここだけでも良いのでゲームをやるなり動画を見るなりしてみてください。多分どこかにはあるはず……）

晴れて恋人同士となった真とみなも。二人は秋人の言う「後」を探そうと決意する。

秋人の机の上にあった写真。その場所へ行くと、そこは彩が巫女をしている神社であった。

彩は秋人を同化体にしたが、なおも生贄が足りずわかばを同化体にすることを決意。

わかばを彩の力の刀で襲うが、その場にいた望の手により阻止されてしまう。

そして、わかばは話を聞いてやってきた真、みなもと望に「彩と話をさせてほしい」と自由にさせてほしい旨を告げる。

これをみなもがそばについているという条件で許可を出した。

そんな時、路面電車で突然彩と遭遇する。彩は町に関する一切合切を真に話す。

その夜、真は望からわかばが帰ってこない電話を受ける。真は真剣を持った望みと合流し、二人はわかば、みなもを必死に探すがあても無く途方にくれる。その時、真の耳にあのハーモニカの音が聞こえる。真たちは学校に二人はいる、と判断する。

しかし、学校内で彩が二人と対峙。望は彩の足止めに成功するが、持病により動けなくなる。望は真に剣を託し、屋上を目指すように言う。

屋上に着いた真はみなもの無事を確認する。だが、わかばを殺した旨を追いついてきた彩に告げられる。

事情を知ったみなもは、彩に人斬りを止めるよう説得するが聞き入れられず、彩は真に斬りかかる。

劣勢の真はついに彩に斬られてしまうが、効果がなかった。それもそのはず、真の力は、相手の力を吸収するものであり力によって作り出した彩の刀は通用しないのだ。そこで彩は真の剣を奪い、真を突こうとした。

だがその瞬間、みなもが真をかばい身体を貫かれてしまうのだった。

そのことにショックを受けた彩は、身を挺したみなもの友情論によって改心し、自分の残りの力を使いみなものを救った。まばゆい閃光の後、彩は消え、傷の癒えたみなものがそこにいたのだった。

(彩 解説)

夜の海、夏祭りと(彩 のフラグを立てるためにwww)彩と一緒に動く真。

そして時は流れ、わかばが彩に狙われた旨を聞く。

なぜ彩がわかばを狙わなければいけないのかを彩に問い詰めるが、彩に「町のために必要なこと」と言われ理解に苦しむ真。

そんな真に声を掛けた秋人は、驚くべきことを口にした。

かつて、秋人とその妻・琴葉、そして真の両親である鳴風信吾・優華は彩に会ったことがあるというのだった。

それは今の姿と変わらない姿であったという。十数年の時が経ったというのだ。

そして彩と少々の交流を交わしたという秋人たちだったが、彩に琴葉を同化体にされてしまった。

信吾が言うには、力には大きさがあり、彩は力の大きなものを狙っているのだという仮説を立てた。

だが、その仮説を証明しようとしたために、今度は信吾が斬られることになってしまう。

身元を知られている秋人と優華はこの町を離れたのだった。十数年前、真がこの街を離れたのは、そのような理由があったのだ。

そして、失踪した母・優華も彩に斬られた。

強い力を持っているために狙われるわかばを、救おうとした結果なであった。

この街に伝わる伝説により、町の人間は力を手に入れた。しかしその代わりの生贄（＝同化体）が必要だったのだ。

彩は生贄を狩るための執行人であったのだが人を斬ることが嫌だったために、最小限にとどめようと強い力を持つものだけを斬ってきたのだった。

秋人は、「自分には妻を殺された憎しみがあるから彼女を救うことができない、だが真ならできるかもしれない。

彩を救うことができれば全て丸く収められるだろう」と言い残し彩に会いに行く。

話を聞いた真は彩を救うことを決心するのだった。

しかし、決意も虚しく秋人は同化体にされる。

真は彩に会いに行くが、冷たくあしらわれる。生贄を狩るためには人の優しさは邪魔だと、だから相手にしないでくれと言う彩。

真はそれに反発した。生贄を捧げなくてもいい方法があるはずなんだと説得する真。

自らを傷つける彩を、身を挺して止めることによってようやく彩は真の説得を受け入れた。

彩はこの街を救う方法を試すために、自分の記憶、考えを真に伝えるのだった。

彩はかつて、この地の神職の一族であった。ある時、兄が生贄を捧げているところを見てしまう。

その行為を止めさせるために、兄と対峙する彩。兄は語るのだった。

はるかかなた昔、風音町（当時は村です）は災害の危機により村として立ち行かなくなってしまうそうだった。

そこで村人たちは御神木に「風の神」を呼ぶことで災害を収めることを考える。

結果として儀式は成功。しかし、その代償に風音町の巫女が「風の神」に生贄として人を「同化体」としなければ いけなかった。

自分たちはその神が見せている夢の中にいるのだと。その心地よい夢を見続けるためには生贄を捧げなければいけないのだと。

彩は兄を殺した。だが、それはただの代替わりの行為でしかなかったのだ。

それから彩は人を斬り続けた。そして長い時が過ぎ、今に至るのだった。

彩が今の立場から逃れる方法は一つ。自分の子供に代替わりさせることだった。

生贄を捧げなければ夢から覚める、そして街は滅びるのだという言葉は、真実なのかどうかは本当は彩も知らない。

そこでもう一つの方法を思いついた。それは誰も斬らないこと、なのだった。

そして最後に、自分が生贄になり姿を消せば全て終わるというのだった。消えるまでの期限は3日間。その間彩は生き延びることができる。と。

彩を助ける方法を探すという真。真は決意も新たに、彩の身体を抱きしめるのだった。

3日間はあるという間に過ぎたのだった。しかしこの3日間にやったことといえば思い出作りだけだった。(PS2版)

(ノーマルエンド)

最後に、指きりを交わす二人。それは真が必ず幸せになるということだった。それと、約束は必ず守ること、というものだった。それは、かつてみなもと交わした約束(真と結婚する)のことを言っ

ただ。苦戦を強いられる真。するとそこになぜ集まったのかわからないがみなも、ひなた、望、わかば、勤、霞のメンバーがそろって真を止めてくれと懇願する彩。しかしメンバーは答えない。

あなたは真のことが好きだっただろうとみなもを説得しようとする。しかし、みなもがついにブチ切れ、彩をひっぱたいた後に「私をバカにしないで！」と叫ぶ。ここにきてようやく真を純粋に応援する彩。

結果。成功する真。しかし、彩にかかった呪いはまだ解けていなかった。

真は吸収した「同化体になった彩の兄たち」の力を借り、彩にかかった呪いを解くのだった。

時は流れる。

真と彩は結婚した。今は二人で新婚旅行中である。

別に新婚旅行だからといってハワイとかグアムとかさういうところに行かないのがこの二人。

日本中の農村などをゆっくり回っている。

彩はもはや趣味となった絵をとどころで描いていて、このときも畑をバツクに真にモデルになってもらうように頼む。

生贄を非情に狩っていく少女の姿はもうどこにも見えなかった。

舞台設定（後書き）

だから彩を救いたかったんだ！！！！by teru&壮一

はい。ここまでお読みの方はもうお分かりですねw

ここまでかなり時間かかったでしょう。お疲れ様でしたm（）（）m
しよーじき、自分でも原作の中身をさらすってのはまずいと思うの
でこの措置は期間限定ってことで。ブログ作ったらそっちの方にこ
れ張りますわ。

もー言いたいことは全部語りました。後はガンガン書いてください
す！

……「バーサーカー」の方を優先しますけどね……………

第一話 Boy meets God

それは冬の朝のことだった。

俺はいつも通り朝4時半に起き、ジャージに着替え、日課の牛乳配達をやっていた。

俺は冬という季節が好きだ。なんというか、空気だけじゃなくて風までもが透明色になったかのようで……（これを友人に行ったところ一笑に付されたのだが）

「おー。今日も憎たらしくらい、良い天気だ。」

別に俺は晴れが嫌いではない。ただ、冬の季節と言ったらやはり多少雲が出て、かつ雪なんて降っていたら最高だろう。まあ、その場合自転車が使えなくなって走りながら牛乳配達をしなければいけないが。

ふと。雲一つないはずの空になにかが見えたような気がした。

そして、次の瞬間。

俺はこの世からおさらばしていた、というわけだ。

「俺は神様って呼ばれてるな。んで、君は死にました」

「……………もうちょっとわかりやすく説明してくれる？」

と答えたのは俺こと久世壮一くせすけいち。いつも通り起きると目の前にいたおっさんに「あんた誰？」と質問した答えが最初の文だ。

「いや、忘れてるっばいけど朝に自転車で走ってた君の上に物を落としちゃってね。で、君はそのままぼっくりと」

朝ってことは毎朝やってる牛乳配達のことか。ぼっくりとって…まあ、ここは素直に情報でも聞き出しておこうか。

「ってことはここは死後の世界ってことか」

「そうそう。というか疑わないの？俺の言ってる事なんてまるっき

りで太話でしょ」

「まー、正直完全に信じてるってわけではないけど、信じなかったら話が進まないじゃん」

これは俺の正直な感想。つーか、そもそも死んだ以上、「はい、あなた死にました。」だけで済むわけがない。この後何があるか……

「なんとというか順応性が高いというか……」

「よく言われる。で？俺は地獄にでも行けばいいのかい？」

「そこでなぜに地獄かね。いや、このまま死なせはしないさ」

「ほう？」

どういうことだろうか。

「俺の責任で寿命を縮めちゃったからね。このままだと上にいろいろ言われるし、何より減棒ものだし」

「要するにもみ消すってことか。悪だな。神様ってのは正義を表している物じゃなかったっけ？」

「まあまあ。じゃあ、どっかの世界に放り込んであげるよ」

！これは…もしかして…異世界ものの二次創作によくあるパターンでは？

「それはゲームとかラノベの世界とかでもいいんだよな？」

「だよ。好きな世界を選ぶといい。ああ、オマケで何か能力でも付けようか？さすがに魔力無尽蔵とかは無理だけど」

「ん~~~~~悩むなあ……」

能力がおまけでついてくるのはありがたい。が、一番最初に考え付いた魔力無尽蔵をばつさり無理といわれると……

「まあそんなに悩まずに。ネギま！？とかゼロ魔とかが良いのか？」

神様……結構オタクだな……そして、二次創作によくあるこの二つを選んだところを見ると二次創作のものもかなり読んでるか……

……？

ぽつと、本当になぜ忘れていたかわからないくらいにその考えは頭の中に浮かんできた。

よし。これなら条件も満たしているだろう。

「じゃあ、Winddで。」

「なんだそりゃ」

「神様……まさかWind - a breath of heart - を知らないって言わないよな……？」

「知らん」

「オラそこに正座しやがれ神様」

「な！？そこまで怒るほど有名なものか！？だったら俺が知っていないわけないんだが……」

「オイ、それは暗に『Windなんて有名じゃないよね？』って言うてるのか？そうなのか？」

「（こいつ……怒らせるとめんどくさいタイプか……？）すみん。マジで知らなかったんだ。教えてくれないか？」

「ああ、いいさ。教えてやるうじやないか。」

「Wind - a breath of heart - ついのはな！元はPC用の18禁恋愛シミュレーションゲームだったものだが、PS2に移植され！ラノベにもなり！果てにはOVA化とテレビアニメ化までしたというMINORII様の作られた……」

（うわ……これは長くなりそうだ……）

（～2時間経過～）

「結論としては、CGはやっぱりPC版だと荒いと感じるけどそれはPS2ではきっちり治っているから問題無い。と、大体こんな感じか」

「いやー語った語った。こんなにすっきりしたのは生きてるときでもそうそう無かったなあ。」

「」

急に黙り込んでしまった。それまでは一応相槌を打ってくれていた

んだが……

「どうした？大体はわかったと思うが」

「いや、本当に好きなんだなあ………とってな。普通いくら好きなものでも2時間連続休みなしで話し切るやつはそうはいないと思っ
っていたんだが………」

そんな当たり前のことを言われてもなあ………

「で、だ。Windの世界に行くことはできるんだよな？」

「ああ。もちろん。」

「じゃあ、時間としてはゲーム本編の真が転校した直後の冬に頼む。」

「オツケーだ。後、話を聞いた感じだとなんかの力を使えるようにしてほしいんだらう？」

「そうだな。じゃあ、『他人の力をコピーする力』ってのはどうだ？条件としては『力を持つている奴に会う』こと」

これは元々、生きていたころから考えていたことだ。

俺はどうしても本編に満足できなかった。

その理由があるキャラの扱いがひどいからだ。

俺はそのキャラを救いたい。

そいつを救うには真の『力を吸収する力』は必要不可欠だ。

生きていたころはただの妄想だったが、今となっては現実のものとなるのか………なんか感慨深いな。

「あ、容量オーバーだ。それで行きたいなら条件追加しろー」

「くそつ。………なら、『コピーした能力は能力一つにつき一日三回までしか使えない』つてのでどうだ。」

「んゝ容量オーバーだな一日一回ならセーフでおまけも付けられるぞ」

一日一回………まあ、元からその予定だったしな。おまけまで付けられるなら好都合だ。

おまけ………おまけか。まあどの世界でも金は必須だろ。

「よし。ならそれで。おまけは『一日の終わりに金を補充する財布』」

つてのでどうだ？ああ、もちろんWindの世界で使える金だ。」「金関係なら結構ゆるいから」いくら使っても金が消えない財布』でもオツケーだぞ」

「ならそれで。ああ、あといくつか聞きたいことが……………」

ん？どっかから足音が聞こえてくるが……………」

「シウステクトリ！返事くらいしなさい！」

遠くのほうから女の声らしい声が聞こえてきた。そうか。こいつはシウステクトリというのか。

「すまん、上司が来たようだ。後のことは何とかして連絡するからこの穴の中に飛び込め！」

と言うやいなや、目の前に直径1mくらいの穴ができた（こいつが作ったのだろう）

「一つだけいいか？」

「なんだ？手短かに頼むぞ？」

「俺に何を落としたんだ？」

「TVのリモコン」

「……………次に会う時を覚悟している」

「え？」

「なんでもない。そら、行くぞ」

「幸運を祈っている。君の行く末に幸あらんことを」

「いちおー神様らしいセリフを吐くんだな。じゃあな。」

そう言っただけ俺は穴の中に飛び込んだ。

これからどんな生活が待っているのだろうか。

「楽しみでしようがないな」

とひとりごちるのだった……………」

ちなみに。

「シウステクトリ……………？あなた今何をしましたか……………？」

「いや！待ってくれ！これには深いようで深くないような理由があ

「つたりなかつたり」
どつちからあいつの減棒は免れないようだ。ごまめ。

第一話 Boy meets God (後書き)

はい。どもです。teruという物体Xです。(よくわからないものって認識でOKです)

ここまで読んだってことはこれからも読む気があるのか？はたまた「こんなもの読んで損した」って感じで右上の×ボタンをクリックするのか……

作者としては非常に胸が痛くて痛くて……(極度の緊張です)できれば感想とかもらえませんか？なんて言ってみたり……

第二話 壮一「こうして俺はWindの世界に旅立つことになった……ってま

「んあ……………」

気がつくと俺は電車の中にいた。周りを見てみると誰もいない。

「え〜次は 駅〜 駅〜」

車掌の声が聞こえるという事はこの電車は動いてるのだろう。さっきからガタンゴトンうるさいし。

俺はポロシャツとジーンズと言う姿だった。ポケットの中に一枚の紙と切符、そして財布があった。なるほど、これがいくら使っても金がなくならない夢の財布か。

紙を広げるとこんなことが書いてあった。

「君がこの紙を読んでいるということは無事にWindの世界に行くことが出来たのだろう。切符がこの紙と一緒に入っているはずだが、それは風音町までの切符だ。風音町に着いたらこの住所にある家に行ってくれ。家の鍵はお向かいの大家さんが持っている。君の荷物は先に家に送っておいた。

あと、君は何も言っていなかったがどうせ真達にも干渉したいんだろう？真達のクラスに転入するようにしておいた。明日から通うといい。

最後に多分君が知りたいだろう住所を書いておくよ。

九月堂 風音市ⅠーⅠ

ゲームの時間でみなもが出てくる辺りで顔を見に行くよ。じゃあ元気で。

署名は正直めんどいし俺が誰かわかってるはずだから省略」

……………このふざけた文章はどうにかならぬのか？サービスが万全なのはとてもありがたいが……………つーかなんで俺が彩に会いたいて分かったのだろうか……………

もう、俺の救いたい少女が誰か解っただろう。そう、月代 彩だ。なぜかと言うなら彩ルートをプレイしてみると良い。PC版ならなおさら良い。きっと俺の感じた怒りを分かってくれるだろう。彩ルートはとて、とても後味が悪いのだ。いや、最悪と言っても過言では無いだろう。(そもそも、彩を攻略するためにこのルートを選んだはずなのに、何故に彩が 代わりに突然降って湧いたかのように が出てくるんだよ!)と昔よく友達相手に喧嘩したほどだ。PS2版だとシナリオが追加されていて、まあ納得出来なくもなかったのだが……

(それでももつと早くに彩の味方になれる奴がいたらきつと楽になるかな……?)

などと考えていると

「え〜次は風音町〜風音町〜」

目的地に着いたようだ。

駅を出ると住宅街らしい場所に出た。

(この辺りはゲーム中には出てこないが……まあどうにかたどり着くだろう……)

と小一時間は歩いただろうか。目的地の家に着いた。平屋だがそこそこ大きく、明らかに俺が一人で住むにはデカすぎる。本当にこの家なのかと思いつつ、大家のところから鍵をもらい、家に入るとやはり大きく感じる。

リビングにキッチンが繋がって一つの大きな部屋になっているところが一つ。寝室用の部屋が二つ(ご丁寧にも片方の部屋には『SOICHI's room』なんて書いてあるプレートが。これは外して捨てておこう)そして物置らしい場所が一つ。

(これって2LDKってやつか……?俺一人にはやっぱデカすぎると思うんだが……?)

と考えつつ、部屋を見ていく。

(なるほど。電気、水道、ガスは通ってる、と。電気の制限もかなり大きいね。これって金ならあるから良い奴にしてくれたんだろうな。感謝だな)

自分の部屋を覗いてみると、

(おお。生きてる頃の部屋のまんまだ)

パソコン、タンス、本棚など自分が使っていたものそのまま置いてあった。これは正直嬉しい。

(読みかけの本があったんだよね)。ってことはネット使えるかな？)

と思いつつパソコンを立ち上げ、google come を起動する。どうやらネットも問題なく使えるようだ。

そのまま九月堂の住所を入れて検索してみる。

(原作に介入するにはまず彩に会わないと。そのためにはまず月代堂に行くことが重要だよな。それにうまいお茶とやらを買いたいし)今の時間は午後2時半。今から行けばまあ確実に間に合うだろう。そう考えた俺は財布を持って月代堂へ向かったのだった。

だったのだが……

(これは無いだろう……)

九月堂の前でポカーンとしている俺。なぜならば……

(もう閉まってるのは早すぎるだろう……)

ドアの前に無情に揺れる『CLOSED』の看板が。

(まだ午後3時。さすがに午後7時とかなら閉まってるのは分かるけれどいくらなんでもこれは……)

しかし、目の前のお店が閉まってるのは事実で。

「さてどうしたもんか……」

と頭を抱えてうずくまると。そこで。

「そこで何をしているのですか？」
と聞き覚えのある声が。

(この声は まさか)

と内心確信しつつ、振り返ると
そこには月代彩がいた。

第二話 壮一「こつして俺はWindの世界に旅立つことになった……ってま

はい。急展開過ぎるとかそんな事言わないで。

タイトルは自分が入れ忘れてただけです；；

忠告してくれた奴には深く感謝をしていますよ？多分。

後半部分はかなり書きやすいんですが、序盤がなかなか進まないんじゃないとお話にもならない；；

もう序盤のあたりは最低限にとどめておこうかなあ……？

なんて考える今日この頃です。

たぶん来週くらいには第3話は投下できるんじゃないかなあ？なんて甘い考えを抱いています……。はてさて、どうなることやら。

第一回 キャラ解説（前書き）

感想で「初見さんにはwindってゲームのことは知らないよ」等
等言われましたので解説を出してみました。

ついでに書いていなかった舞台裏の設定もまとめて出そうかなーと
思います。いちいち話の中で出すのめんどいし。

とは言ってもすぐに第二回のキャラ解説が出そうですけどね……

第一回 キャラ解説

久世壮一 くぜ そういち 17歳

能力：他人の能力をコピーしそれを使うことができる（ひとつの能力につき一日一回まで）

テンプレ神様のミスで死んでしまったかわいそうなテンプレの転生者。

彩のことを原作よりも早く開放したいとがんばっている（はず。多分）

趣味は自転車。「実益を兼ねた趣味」として毎朝牛乳配達をやっている。

また、ギャルゲーをやっている友達がいた。「wind」の情報はそいつに叩き込まれた。第二話での「〜と喧嘩したほどだ」の喧嘩した相手。ちなみに相手は「お前湧いて出たはないだろう！」と言って平行線だった。

持ち物は元の世界のもの＋いくら使っても金が消えない財布。ぶつちやけ性格は適当。まあ、普通のやつではないのは確か。多分。

ちなみに「死因はリモコンに潰された」正直こんな死に方させるつもりじゃなかった。ごめん。

シウステクトリ ??歳

能力：神様なんでそれなりにできることは多い。

壮一を殺したテンプレ神様。壮一を「wind」の世界へ飛ばしたバカ。

趣味はなるうとかファンとかの作品を読み漁ること。

少年魔法先生とか桃髪のロリご主人様が出てくる作品が特に好きら

しい。

ちなみに神の中では位は真ん中くらい。第一話のラストで怒られていたのは上司。

壮一による解説の時に「こいつに趣味のことは絶対に聞かないようにしよう」と固く心に決めたようだ。

暇だからテレビでも見るかと思った時にリモコンを落としてしまった。

ちなみに給料は60世紀の間半額になったようだ。

原作キャラ

月代 彩 つきしろ ひかり ??歳

能力：人を近くに寄せ付けない「結界」を張ることができる。

能力を持った人を刀で斬ることでその人を「同化体」とすることが出来る。（同化体については次の解説で）

身体能力の向上。

e t c ……

骨董品店を営んでいる謎の少女。みなも（原作ヒロイン）と同じ学園の制服を着ていることもあるが、学園内では見かけない。無表情で、どこか達観（諦観？）している。（wikiより）

人を同化体とすることで風音町（の中で能力が使えること）を護っている。表情を変えることはほぼ無い。（原作内）はずなのだが…

……?

今回のオリ主とのメインヒロイン。性格は 。（原作とは変えています）

ちなみに骨董品店（九月堂）の が苦手。自分の家ではちゃんとやっています。

第一回 キャラ解説（後書き）

まだ出てこない原作キャラの解説は舞台の解説にてやりました！

彩ちゃん的能力は原作と小説をちゃんぽんにした感じ。

……………彩ちゃんの性格は結構変わってます。

第三話 壮一「キャラ崩壊してるような？……気にしたら、負けってことが……」

えー。ほぼ一ヶ月くらいまったく更新しなくてすいませんm(

ー)m

ちよつと期末テストというモノに囚われていて……

つい一昨日に片がついたんでやっと復帰です。

え？昨日ですか？

………今回もひどかったテストの結果に怯えていました………

第三話 壮一「キャラ崩壊してるような？……気にしたら、負けってことが……」

「そこで何をしているのですか？」

返事が無い俺を怪しく思っているのか警戒を表に出しまくりな少女の二言目。

何か返答を返さねばとは思うものの

(うわリアルな彩だよっばここってwindの世界なのかあのバカ神マジで神様だったのかぁーリアルでRitaさんボイスの人間がいるとは思えなかったけどさすがはゲームの中っていうかここって原作の中なのか？いや、それはわかんないし考えてもしょうがないだろっつてちよつと待てこんなんじやまともに話ができねえっつて話すつても何を話すんだよああもう何がなんだかわかんなくなってきたー！！！！)

見てのとおり絶賛混乱中だった俺に返事がすぐに返せるわけもなく無言でいると俺を見る彩の視線がだんだんと敵を見るそれにつてさすがにそれはまずい！

(とにかく何かを話さないとだろ。話すついたらまず挨拶からだよな)

なんとかここまで思考を落ち着け、

「やあ、こんにちは」

やっと、まともに話をする事ができたのである。

俺情けなっ！

私がそれに気づいたのは神社から店へと帰ってきた時だった。店の前でうずくまってああだのううだの言っている男に気づいたのは。

話しかけてもぽかんと口を開けてこの顔を見てくる。私が二回話しかけてやっと

「やあ、こんにちは」

と挨拶を返したのだ。

「貴方はそこで何をしていますのですか？」

男が挨拶を返したのでこう話しかけると、

「いやーちょっとこの店に用があったんだけどさ。見てのとおり閉まつてるでしょ？だから途方にくれていたわけさ」

何故ならば常に私がない時の店には結界を張っていて誰も気づかないようになっていたはずなのだが。

(この人結界が効いてない……………!?)

最初、私は警戒していた。一瞬、目の前の男は私を殺しにきた誰かなのかとさえ思った。だが、相手は明らかに戦うには腑抜けすぎている。ならば何のためにこの店に来たのだろうか。

この時、私はどうかしていたのだろう。基本的に人には無干渉を心

がけていたのだが、

「どんな用でしょうか？もしかしたら手助けができるかもしれませ
ん」

などと口走ってしまったのだ。

「ホント！？いや、たいした事じゃないんだけどね。ちょっとここ
のお茶がおいしいって噂を聞いたからさ。気になって買いに来ただ
けなんだけどね。」

と頬を掻きながら苦笑する男。

(……………はあ。何を警戒していたのか。ただの客じゃないか)

「なら今、店を開けますね」

と鍵を取り出しながら店の『CLOSED』の看板を『OPEN』
にひっくり返す。

ガチャ

「どござ」

私と彼の最初の出会いはこんな感じだった。

s i d e o u t

「どござ」

と店の中に俺を誘う彩。………なんだか呼び捨てにするのは違和感があるな。彩ちゃんでもいいか。

「中、ちよつとごちやごちやしてますので。気をつけてください」

(こりゃあ気をつけるってレベルじゃないだろ………)

店の中は阿鼻叫喚地獄絵図………もとい。骨董品で溢れかえっていた。

「ちよつと待つててください」

と言い残して店の奥へと足を向ける彩ちゃん。

ゴミの中をすいすいと歩いていく………言っちゃあなんだが。

さて。ここで何をして彩ちゃんを待とうか。

(決まっている。どこまで情報を絞っていくか。自分は何者であるかはどの程度まで偽るのか)

まあ当然といえば当然だろう。むしろここにくるまでにそれを終えていない俺は考えなしという奴かもしれない。はあ。

(お茶はあくまで噂で聞いたってスタンスでいくしかないか。俺自身はつい先日ここあたりに越して来たってところか。学校についても同様でいいか。能力については「今」は何もないはずだからそれを通すかな)

ある程度はこつちの情報を流して信用してもらわないと。まず信用がないと救うも何もない。

「お待たせしました」

と、ちようどまとめ終わったところで彩ちゃんがお茶を持ってやってきた。

「……んー、150gくらいってとこかな？なんとなくだけど。」

「1500円です」

予想外に高いことに多少驚きつつ、重大なことを思い出した。

「あ。そういえばこっちに急須とか持ってきてなかったっけ。ここで急須とかがって買えるかな？」

「はい。買えますよ」

「ならそれもついでに。ああ。後、お茶の淹れ方を教えてもらえると助かる。家ではティーバッグのお茶しか飲まないから。なんならそれにお代を払ってもいい」

「なら実際にここで淹れましょうか。用意をするので少し待っていてください」

また奥の方に引っ込む彩ちゃん。危ない危ない。これで話が終わってしまったらただの客としてしか扱ってくれないだろう。せめてもうちよつと話をしたいものだ。

5分後。

彩ちゃんが戻ってきた。手にはポットと急須、湯飲みが二つ。よっ

しや。実際にご馳走してくれるみたいだ。

「それでは淹れ方から。まず、湯飲みにお湯を入れて湯のみを温めます」

(少女説明中)

「と、二人以上で飲むならこのようにお茶の濃さを均等にします」

と教えてくれる。もちろんメモを取っている俺。

「どござ」

「お、じゃあ頂きます」

原作キャラも絶賛の「紫光院のお茶」こと九月堂特製のお茶。

一口すすってみる。

(ん？渋くない上にきつくない程度に甘い、かな？飲んだ後がスッキリする)

まあ。一言で言うなら、

「うまい」

訳で。

「ありがとうございます」

……そりゃあ。この少女はこつこついうキャラとは知っているが。会ったときから能面のように感情をまったく見せないというのはどう

いつもんだらうか。彩ちゃんの過去からすればそのことはわかるが。把握できると納得するのは話が違つと思つ。

なので。

「そつえばね」

「？」

ちよつといじめてみることにした。

「こつてちよつと散らかりすぎているよつな気がするんだけどどうだらうか？」

「！」

（おーおーピシッって効果音が入りそうなくらいに固まっちゃって）

「……………すみません」

むすつとした顔を見せる彩ちゃん。たとえ怒つていても能面よりはいい、よな？……………多分。

（いや、まずい……………かな？）

「あー、別に責めたわけじゃない。ただ、何か理由があるならそれを聞きたかっただけだよ」

（嘘です。ちよつと感情を動かして見ようなんて考えてましたすみません……………）

と内心ではジャンピング土下座を決めている俺。

すると、

「この店は骨董品店なのですが。なかなか重いものが多くて私一人では運びきれないんです。のでどうしても……………」

「あれ？この店って君だけがやってるの？家族の人とかに手伝ってもらえば良いんじゃない？」

あえて何も知らない風に聞く。いや、聞くしかない。ここで「家族がない」ということを知っている「事を知られるのは得策ではない。心が少し痛むがまあ仕方ないだろう。」

「家族、ですか。もうとっくに死にました」

少し、しゅんとしてしまふ彩ちゃん。

……………原作より感情が見え隠れする。そんな姿を見ると

(ぎ、罪悪感があ……………)

ので、心よりこう言うしかなかった。

「あー、ごめんな」

「いえ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

き、気まずい……………自分からこの空気を作り出したとはいえきついものがある……………」

「な、ならさー！」

「?」

「俺がここの掃除をやるよ。うまいお茶を飲ませてくれたお礼だ」

せめてこれくらいはやりたいものだ。ていつかここ本当に汚いし。

「え、いや、でも」

「まあまあ。それにこのお茶は美味かったし。何回もここに通うことになるんだから少しくらいは良いじゃん」

と無理やり押し切る。ここでまた会うフラグを立てておけば少しは楽になるか。

「年末近くになったらでよければ、いつでもここに来るぞ。まあ袖触れ合うも多少の縁って言うし。茶と一緒に飲んだならそこそこの縁じゃないかな?それに少なくともこのお茶はここの掃除くらいはしても良いかなって思う程度に美味しい」

自分でも意味がわからない。が彩ちゃんはなんとなく納得してきたようだ。

「それならお願いしますね。12月の第3週の日曜でどうですか？」

と笑う彩ちゃん。おおう……………破壊力が強いよ……………

こうかはばつぐんだ！

きゅっしょにあたった！

をダブらせるくらい強い……………

「うん。わかった。お茶ご馳走様」

「お粗末様でした」

さて、じゃあ次の場所は……………
つと忘れていた。

「俺の名前は久世壮一。君は？」

「月代彩です。」

「彩ちゃんか。いい名前だね」

「……………////」

ありゃ？照れるような台詞じゃない気がするんだが。

「じゃあね。また掃除のときに」

「オホオオ」

「こうして俺はフラグをゲットしたのだった。(?)」

第三話 壮一「キャラ崩壊してるような？……気にしたら、負けってことか……」

いきなり設定などを変えています、ちゃんと原作スタート時には原作どおりにできる……はずです。（一部除く）

彩が初っ端からデレかけてるのはデフォ！（オイ）
ちゃんと理由は考えてますよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8070x/>

Wind -an irregular blow tender breath-

2011年12月15日02時53分発行